



経済学とはなんだろう。

経済学とはレンズのようなものだ。ぼやけた対象をくっきり見えるようにするツールだと思う。レンズを換えれば見たいものだけに焦点をあわせることが出来る。私たちは経済学というレンズを通して複数の対象における関係を明らかにして、そこに生じる効用や問題を知ることができる。経済学を勉強すると、物・お金・人の流れを理解することになる。繰り返される議論は結局のところ、「市場とは何か、社会を構成する人々がどのように行動するのか、それらの関係によって市場はどう変化するのか」といったものである。なぜ経済学を学ぶのかわからなかったのは、与件があって、現実とは程遠い条件の中で法則を見出して何になるのだろうと思ったからである。しかし、今はなんとなくわかる。普遍化することに意味がある。パターンがいくつも考えられたとしても、ある一定の傾向を導き出すことで現状や問題を整理することができるからだ。私が私のことを、周りで生活している環境のこと、日本のこと、日本と外国のことを“知る”ためには経済学が必要である。

私たちにとって経済学とはなんだろう。

経済学とは想いを引き出すツールだと思う。知識を蓄えるためのものではなく、レンズを通して知ることが出来て始めて、新たなアイデアが生まれる。あれこれ考えているうちに、“こうなったらいいのに“変えられるかもしれない”という想いになる。これまでで考えられたものと比較することで想いは検証されて、また違う想いが生まれる。想いは続いて少しずつ道を作る。道はいくつも枝分かれしているのでたくさんの人を巻き込んで現実の世界を変えることもできる。否定される道もあれば再構築される道もある。想いと現実を結ぶのも経済学の大きな役割だ。

私にとって経済学とはなんだろう。

経済学とは“希望への道”だ。私は大学で経済学という道を少し歩いてみた。そしてこれから先、社会に出てからも想いを抱いて、時にはレンズを覗いて、道について考えていくことになるはずだ。



生活そのもの。こう考えたのは、“What is economics?”の一文に「経済学は人々の経済行動」と書かれていたことにもよる。自分の欲求（無限の欲求）に対してお金や資源といった希少性のあるものをいかに有効に利用していくかを日々の日常生活で考えていかなければならない。毎日どことなく生活している生活自体が経済学なのであって、自分はその“経済学”というものの中で生きている。このように考えることや、この考えこそが“わたし（自分）にとっての経済学”なのではないかと考えた。



私にとっての経済学とは、ものさしを使って物事を比較、分析する学問です。経済の根本にあるのは、日常の中の人びとの無限の欲求だと思います。例えば、「ブランド物の鞆が欲しい」。しかし、そのためにはそれに見合ったお金が必要になります。ここで問題が発生します。欲求に限りはないけど、お金には限りがあります。無限なものを有限なもので満たさなければなりません。有限なものはお金だけでなく、時間や資源も当てはまります。比較、分析し、なにが最善の解決策なのかを考える。私はこのような事が経済学だと思います。



私にとって経済学とは、社会を知るものさしである。高校生の頃、自分の進路を考えるにあたり大学で何を学びたいかを考えた際、私は世界各国の現状や関係を知りたいと思った。それを客観的に見ることができるのは、経済学を学ぶことだと考えた。なぜなら人々は何をするにもお金が大きく関係するからである。経済学を通して理論やお金の動きを学ぶことで知ることができるものは多いだろう。

私にとっての経済学

大学に入学し早くも3年になるが、その考えから何か変わったことがあるかといえば特にない。しかし、論理がそのまま世界の動きとイコールになっているわけではないことを実感する日々である。なぜ理論通りに世の中が動かないのか、現状と理論の差異を深く学んでいくことが私の学習面での目標のひとつである。授業で学ぶだけでなく、新聞やニュースなどにもアンテナを張り巡らせ、世界の動きを敏感に察知できる人間になりたい。



私にとって経済学とは、一国全体や一個人、企業など様々な側面から、お金のことでなく私たちの身の回りのことや今社会で起きていることなど、あらゆることについて学ぶ学問のことだと思う。また、そこで今あるお金やモノ（財）の中でどれだけ「効用」を高くできるかなどについて学んでいくものではないかと思う。



私にとっての経済学とは、それは「世の中の流れをつかむこと」である。需要と供給によってもものの価格は決まる。需要は人々がそのモノをどれだけ欲しいか、必要としているかであり、モノの価値を表せる。私たちは生活する中で、必需品のみを購入するのではなくそれ以外のもの、贅沢品にもお金をかける。また流行や天候などによってモノの価値は変わる。なので、需要側も供給側も不満のない売買ができるように、あるモノは人々にとってこれだけ必要だから、この値段で売るといった生産プロセスは成り立たない。

私にとっての経済学とは、売買を行う狭い範囲だけでなく人々のニーズや社会情勢など広い範囲の情報を読み取ることが必要だと思う。必ずしも予測通りにはならない人間の行動を把握し、経済への影響を予測することが経済学の面白みだと思う。



人間の金銭行動を分析し、時々の社会を知る学問。単体の生産者・消費者や、人間が構成する企業や国など集計水準においても、人間が行う金銭やそれに代わる何かに伴う行動を分析することで、現在だけでなく過去や未来など時系列を問わず、その時々の社会を知ることがき、多くの人間が幸福となるために、起こりうる出来事や改善策等を講じていくための基礎となる学問だと考える。



経済学部生として過ごして今年で三年目になる。大学では社会経済学、現代経済学、統計学、財政学など様々な授業を受けてきた。授業では、ミクロ経済学の基礎や経済的な指標としてよく用いられるGDPの算出の方法、日本経済の制度などを学んできた。これに加えてゼミでは労働者問題や社会保障制度、アメリカ経済、フィンランドの社会などについても学んできた。では、私にとっての経済学とはどのようなものか。

私が大学生活で考えた経済学とは、「今」のことを主に考えているようで、本当はその先にある「未来」や「将来」のことを考える学問なのではないかということだ。もちろん過去のことも学ばないわけではない。しかし、私は経済学とは日本社会、日本経済がよりよい状態になるために「今」の時代のことを徹底的に研究しているのだと思う。よりよい状態というものがどのような状態のことを指すのかも曖昧で根拠もないが、やはり重要なのは労働者問題だと考えていて労働者全員の「働きやすい」が国民全体の「暮らしやすい」につながると思う。

最初に述べたように、私は日本経済の問題や社会問題について学んできた。それは紛れもなく現在起こっている問題だ。しかし、その現在起こっている問題を分析したり過去の事例などと対照したりすることによって今後同じことを繰り返さないため、よりよい社会にしていくためにどうすればよいのかを考えている。つまり、何年後、何十年後の将来のことを考えているのだ。ゼミでの議論でも何かの問題に対して、ではその問題を解消するにはどうす

ればよいのかを考えることは常に求められている気がする。最近では起こってしまった問題をどうするか考えるのではなく、問題が起こらないようにするにはどうすればよいのか考えることが多いが、それも近いとはいえ将来のことを考えるということには違わないのではないだろうか。

少なくとも私にとっての経済学とは「考える学問」であると言える。



私にとっての経済学とは人、社会を分析する学問分野であると思う。

現代の社会においては、「企業」「家計」「政府」という三者によって「生産」「消費」「分配」市場は構成され、その市場の中で金銭が循環している。それぞれの企業、家計は自らの効用を最大化しようと商品を生産、購入しようとする。しかし、企業と家計だけでは安定性を欠くために、政府が市場に介入・分配を行い市場の安定化を図っている。この「生産」「消費」「分配」という三要素全体、それぞれの要素を個別にみることで、現在はどうのような社会であるか、どのような社会を望んでいるのか、現在の人の価値観はどうのようなものかということの研究する学問が経済学であると思う。

市場がどのように機能しているかを見るだけでも人の価値観を知ることができる。現在の日本の市場では企業、家計が自由に自らの効用を最大化しようという力が強く働き、政府の介入はできるだけ最低限であることが望まれている。この背景にあるのは、現在の人たちの価値観は「平等」よりも「自由」に重きを置いているという事がある。他にも市場ではどのような商品にどれだけの価値をつけられているのかなどを見ることによって、人の価値観を知ることができる。

しかし、現代の市場はこの三要素だけで捉える事が出来ないほど複雑化している。例えば、企業は自らの利益を最大化しようと活動する。だが、商品を生産する過程で環境に対して大きな負荷がかかる。この環境に対する負荷を考慮に入れ、利益を上げることが現代企業に求められている。この考え方によって生まれた新たな学問が環境経済学である。その他に企業の取引相手は国内の消費者だけではなく、国外の消費者も取引相手になっている。このように国際的な市場について学ぶ学問が国際経済学である。このように現在の市場は従来の経済学の概念だけでは全てを捉える事が出来なくなっている。そのために環境経済、国際経済、経済史、企業経済、家計経済といった従来の経済学を補う新たな経済学が生まれている。最初に書いたように経済学とは人、社会を分析する学問であると思う。その主な研究対象は市場、企業、家計、政府であるが、その他の要素も大きく影響を与えている。その影響を与える要素を分析しようとする新しい経済学が次々と生み出されている。このように広域的な学問領域を含みつつも人、社会を分析するのがこれからの経済学であると思う。



経済学とは社会科学の学問であるが、経済学は広い定義を含んでいるように思われる。つまり、人間がどのように労働し、労働の成果とどのように関わるのかについての研究である。市場と交換の研究もその一部に含んでいる。また、経済学は歴史、技術、伝統、家族、権力、闘争などその他の多くの事柄を研究する学問である。そして、経済学は人間の経済行動、すなわち、私達が必要とし、欲している財やサービスが取引される市場において需要と供給をもとに生産と分配についての研究である。財とは人間の欲望を満たす財・サービスを生産するための投入物、すなわち生産要素である。また、市場に出回っている貨幣量の調節を研究する学問であると考えている。

経済学では経済をみる視点として2つのものに分割される。1つはミクロ的方法で、個々の家計や企業を中心にみてゆくものでありミクロ経済学である。もう1つはマクロ的方法で、経済全体を1つのものとして、集計水準でいかに機能しているかとらえるマクロ経済学である。

経済学において限られた対象から最適なものを選択することが必要になってくる。選択は

競合する複数の対象があつてこそ、問題になる。つまり、経済学では、「稀少な財・資源を、競合する目的のために選択・配分する仕方を研究する学問」ということが出来る。

■

前回のゼミで「お金をやりくりする中で黒字を目指すということ」、「現代社会というものを分析する学問」というのが「私にとっての経済学」として取り上げられていた。では、私にとって経済学とは何なのだろうか。正直に言えば、「わからない」というのが現地点における私の経済学に対する見解である。仮にも経済学部の大三年生として情けない答えかもしれない。それでもあえて今の私の表現できる言葉として残すとすれば「すべての人々がよりよい暮らしを享受することができるように弊害となる様々な諸問題を解決するための学問」ではないかと思う。我々人間が生きるためには衣・食・住を満たすことが不可欠である。しかし、現実にはすべての人がこれらを満たしているかといえば疑問である。寒さを防ぎたくともそれをしのぐものがない、空腹を満たしたくとも食べることができない、住むべき場所がなく路上で過ごすしかない。現在の社会ではこのような人々であふれかえっている。これらはすべて人間が社会の中で行う行為の結果である。だからこそ、幅広い分野に精通し、人間が社会の中でどのように行動し、どのように行動すべきかを追及し解決する学問が必要であり、それが経済学なのではないかと私は思う。

□

私は経済学を「人間とお金と国の関係を考える学問」だと考えている。「お金」は人間が発明したものであるが、人間はしばしばそれに支配されてしまうことがある。現代社会の大きな問題である「貧困」もお金がないことで人々が様々な場面で苦しみ、またそれによって派生する「格差」が、人々の健全な心まで蝕んでいく。(例えば、貧しくなりたくないからという理由でほかの人を蹴落としてまでお金に固執するようになったり、貧困層の人が富裕層の人の家に強盗に入ったりする、など)

しかし当然のことながら、お金は人間を幸せにすることもできる。むしろ、幸せにする場面のほうが多い。お金によって人々は住居や食料、生活必需品、様々なサービスなどを獲得し、生活を営んでいる。私自身も小さなときにお金を一所懸命に貯めて、ずっと前からほしかったラジコンカーを買えた時はかなりの幸福感に満たされた(そのあとラジコンカーはすぐに壊れてしまい、私はその倍の悲しみに暮れることになるのだが・・・)。そして、それら人とお金を束ねてコントロールするのが国である。国は人々がお金によって幸せになる場面を増やすために経済政策のみならず、福祉政策や公共事業を行う。もちろん国は「貧困」や「格差」といった問題を悪化させる政策をするべきではない。

「人とお金と国」の関係を「人とお金」の範囲に絞るのが「ミクロ経済学」で「お金と国」の範囲に絞るのが「マクロ経済学」という定義も可能である。

100年に1度といわれる世界的経済危機の今、多くの人がお金によって不幸になっている。そのとき国は人とお金の関係を修復するためにどのような政策を行えばいいのか。国とお金がどうあるべきか。それを考える「マクロ経済学」をここで勉強するのは大変重要なことである。ゼミにおける「マクロ経済学」のメニューはきちんとこなして、これからの「国とお金の関係」を考えられるようにしたい。

□

私にとっての経済学とは、「剣」である。我々が生きていくうえで、経済は切っても切り離せないものだ。もはや人間の体の一部になってしまったと言っても過言ではない。いや、もうすでに人間は経済に支配されているのかもしれないと私は考えている。そんな、巨大化してしまつた経済に立ち向かうのが経済学なのだ。経済学を学ぶことにより、経済を知り、経済を知ることにより、己を知ることができる。我々が作り上げてしまつた経済という恐ろしい存在を飼いならすためにも「剣」である経済学は今の我々に必要なのだ。

□

私にとって経済学とは、共通の価値尺度を用いて様々なモノ（国力・サービス・自然など）を測り、比較し、より良い環境を目指す学問だと思います。

□

私にとって経済学とは、『人間の自由と平等を基盤とすることを目標に、“お金”と“モノ”の流れを扱い、生産物（財やサービス。モノ。）や貨幣（お金）、労働力を如何に効率的・合理的に配分するかを考察する学問』である[※モノには時間や情報なども含む]。その中で参考にする経済指標と目標とすべき条件は以下の通りである。

[経済指標]

- ・HDI（人間開発指数）・・・その国の、人々の生活の質や発展度合いを示す指標
- ・GDP（国内総生産）・・・経済の生産規模や所得規模を示す指標
- ・物価指数、物価上昇率・・・物価の水準やその上昇率を示す
- ・成長率・・・経済の規模の拡大の程度を示す
- ・消費・・・家計による消費のための総支出額
- ・民間設備投資・・・企業部門による投資支出額
- ・政府支出・・・政府の支出規模（政府消費と公共投資が含まれる）
- ・輸出・・・日本から海外への財の輸出
- ・輸入・・・海外から日本への財の輸入
- ・貿易収支、経常収支・・・海外との財やサービスのやりとりの収支
- ・利子率(金利)・・・金融資産の収益や貸し借りの金利を表す指標
- ・失業率・・・雇用の状況を示す指標
- ・マネーサプライ(通貨量)・・・金融市場の状況を示す重要な指標
- ・為替レート・・・自国通貨と外国通貨の交換比率
- ・政府財政収支・・・政府の収入と支出の関係を表す指標

[取引が行われるときの目標とすべき条件]

- ①自由で平等な市場が存在すること
- ②完全雇用が存在していること
- ③物価が安定していること
- ④貧困状態にないこと
- ⑤平和であること

□

私にとって経済学とは、人々がどの程度幸せなのかを測ることであり、また人々が幸せであるためには何をすべきなのかを考える学問であると考えている。経済学は一般的に、有限な資源からいかに価値を生産し分配していくかを研究する学問と考えられているが、私にとっての経済学はそれも経済学の一部であると考えている。元来人間はモノを作ることによって生きてきた。作ったモノを自分のためだけではなく他の人のために作るようになり、自分の作ったモノを他人が作ったモノと交換し利益を上げた。時代の流れとともにお金が出現し、お金という尺度でどの程度個人が利益を上げているのかわかりやすくなった。そんな中より利益をあげるためにはどうすれば利益が上がるのかを考えていき、考える範囲が自らの店だけにとどまらず、同業者や地域の店、次第には社会全体を考えるようになった。そういった意味で人間は自らが幸せになるために利益を得ようとしてきたのである。だから私は経済学とは、本来人々がどの程度幸せなのかを測ることであり、また幸せであるためには何をすべきなのかを考える学問であると考えている。

私にとっての経済学

□

以前の私にとって経済学とは、お金の流れやあり方を学ぶためのものであり、ただの学問上のもので実生活との関係性を全く感じないものでした。しかし、大学で経済学をさまざまに学んでいくうちに経済学は以前より身近なものになったように感じ、私にとっての経済学は、人々の生活をより良くしていくための学問であり、それを実現しようとしていくものになりました。

人々のより良い生活というのは、金銭的に豊かであることだけではなく個人や社会の幸福が確保されている社会にあるはずです。そのよりよい生活や幸福を確保していくためには、限りなく客観的に考えることが可能な経済学というものは非常に有効ではないかと思います。

□

「経済学とは何か」という問いに対して授業で「お金をやりくりする中で黒字を目指すということ」、「現代の社会を分析する学問」などが挙げられた。では「私にとっての経済学」は何なのか。「私にとっての経済学」は社会科学のうちのひとつであり、人間が生活する上で身近で実用的な学問である。社会科学は社会現象を研究の対象とする学問であり、政治学や法学などもその中に含まれる。経済学の主な役割は、やはり社会現象を分析するという所であり、それをどのように今の社会で活かしていくかを考えることだと思う。

社会科学や自然科学にしても、どれも人間が関わっている。自然科学は人間が自然を対象とし、社会科学においては社会を対象としている。経済学に関しても同様であり、経済と人間は深く関わっている。経済学を全て把握しているわけではないが、今まで学んできた経緯からすると、経済が存在するのは人間同士の間だけであり、人間が経済を動かしている。経済学を学ぶことは経済について考えるという所が大きいですが、人間の生活等に役立っているという部分も少なからずある。授業で扱った“*What is economics?*”で書かれている経済学は社会科学であるという点には賛成だ。しかし、ただ社会について考えるだけではなく、よりよい社会を築くための対策を考えるためにあるものだと思う。

□

わたしにとっての経済学とは、私たちの日々の暮らしから国の方向性まで、現実の社会で起きているさまざまな問題を「モノとお金の流れ」の視点から分析し、豊かな社会を実現するための学問であると考えている。例えば、個人の人生設計や、国家の運営、少子高齢化、雇用などの複雑な世の中の問題も経済学からアプローチする事で解決策が見出すことが可能になる。

□

私にとっての経済学とは「社会を知るためのツール」です。大学に入り今まで学ぶことのできなかつた専門的な科目を多く学び、そう思いました。特に社会と密接に関係のある経済学は入学する前から学びたいと考えていましたが、一年間勉強し今その気持ちがより大きくなっています。社会に出るまでの期間法政大学経済学部出身だと誇りを持てるようにしっかりと経済学を勉強したいと思っています。

□

普段私はアルバイトをし、お給料をもらう。そのお給料を銀行に預け入れて、使う分をまた銀行から引き出す。引き出したお金を節約しつつ、交際費や買い物などに使う。私にとっての経済学とは、このように給料をもらい、その給料を使いながらも節約をして銀行の預金を増やしていき、自分の持っているお金で、生活をやりくりしていくという一連の行動のことである。
